

## 内容類型学と琉球方言－「主体－客体」表現をめぐって－

2011.7.3 (中日理論言語学研究会)

まつもと ひろたけ

1. はじめに (主体－客体関係について) 動作や行為には動作・行為のシテが存在する。それが他者にはたらきかける動作や行為だと、動作・行為のウケテがなくてはならない。このような言語外の現実にはばられて、言語のなかでも、動作・行為をめぐるシテ－ウケテ (主体－客体) 関係は、文においてあらわしわけられる。ただその区分のしかたは一樣ではないし、文における主体－客体関係の表現者である主語や直接補語の対立のしかたもさまざまである。ともあれ、主体－客体関係の表現が言語にとって必須のものとしてユニバーサルにあらわれる点に注目して、クリモフの言語類型学が成立した。なお、言語にとってユニバーサルな意味・機能関係には、主体－客体関係以外にもいろいろかんがえられることはクリモフも指摘する。そのなかでも日本語のがわからみて、テーマ・レーマ関係の必須－普遍性にもとづく類型学をたてることができるかは関心事だが、ここではとりあげない。

文で主体－客表現をになう名詞項のうち、主語はとりわけ重視されるが、日本語に関しては、他言語、特に印欧語などと主語の地位に差のあることが主張されている。しかし、サピア『言語－ことばの研究序説－』のつぎの指摘は、諸言語に通じたサピアの発言ということからみて、そのようなちがいの存在を視野におさめたうえで、シテ－主体表現のおもさをのべているとかんがえられる。

わたしは、時、所、数、その他多くの可能なタイプの概念に関する話題については黙っていてもかまわないが、だれが殺しをおこなっているのか、に関する問題を避けることは絶対にできない。知られている言語で、この問題を避けることのできるものや、現にさけているものは、ひとつも存在しない。(安藤貞雄訳・岩波文庫による)

文の意味構造にかかわる主体－客表現は、どの言語においても、ひとしい重要性をもっているのだろう。主語の地位のちがいは、機能構造の面にあらわれてくるのではないだろうか。

2. 主体－客表現のあらわしわけのパターンから) 文にあつて主体－客表現をになう名詞項である主語、直接補語がどのようなかたちをとってあらわれるかを、両者の対立のパターンをとりだしながらしめしておく。ここで、主語、直接補語などというのは、すでに一定の言語タイプを前提としていることになるが、説明の便宜のためにはこれでいいとおもわれる。主体－客表現で名詞項と対立する述語動詞のほうに、自動詞、他動詞の用

語がでてくるのも同様である。

さらに便宜をはかるために、名詞項のところを日本語の格形式でしめすことにする。標準文章語のガ格、ヲ格にくわえて、格のマークのつかないハダカ形もいかすといくつかのパターンがとりだされる。

- a アグリ ネット ダス。(他動詞文)  
ネット デル。(自動詞文)

自動詞文の主語と他動詞文の主語が、ともにマークなしのハダカ形で直接補語に対格マークがつくのは、ふつうの対格タイプである。これを主格（あるいは名格 *nominative*）タイプとよぶこともあるが、マークのつきどころによってよびわけの必要が生じるばあいを想定して、ここではしまっておきたい。

- b アグリガ ネット ダス。  
ネット デル。

自動詞文の主語と他動詞文の直接補語がハダカ形で、他動詞文の主語がマークされた格形になっていると、能格（作格）タイプになる。このタイプはマークされた格形のところをとりだしてなづけている。

対格タイプと能格タイプの対立として、うへのふたつのパターンがしめされるが、両タイプの（内容面での）ちがいは、主語と直接補語の格表示の対立のちがいにあるのだから、マークのつきかたがちがってきても、うえにみた対立が実現することがみとめられる。

- c アグリガ ネット ダス。  
ネットガ デル。

これは a タイプとちがって、主語のほうがマークされ、直接補語がハダカ形になるが、対立のしくみは a タイプとちがわない。a タイプをマークのありどころから対格タイプといったとすれば、c タイプは主格タイプである。ここで、さきにとっておいた主格タイプのなづけがいかされる。主格タイプは対格タイプとおなじひとつのグループをなす。marked *nominative* のようななづけもその点をとらえているのだろう。c の主格タイプはアフリカ諸言語に特徴的にあらわれることがいわれるが、琉球方言のなかにもみられるし、カフカス諸言語にも指摘されていた。

a と c の対立を能格タイプのところにもちこんで、b に対立する d をかんがえると、つぎのようなタイプがでてくる。

- d アグリ ネット ダス。  
ネット デル。

d タイプは、名詞の語形の分布のうえでは、他動詞文の主語に対して、自動詞文の主語と他動詞文の直接補語とが一体となって対立している点で、能格タイプとおなじである。しかし、能格タイプが、他動詞文の主語が、ハダカ形でなく、能格という特別にマークをうけたかたちであらわれるということを前提とすれば、とりださなくてもいいようである。

ただし、ネツヲ ダスーネツヲ デルのような対立は、あとでふれるように、琉球方言話者の標準語の誤用表現としてあらわれる。

ここまで紹介したなかに、まだ標準語の対立のパターンがでてこないが、それがうえまでの例とはちがっていることはあきらかである。

- e アグリガ ネツヲ ダス。  
      ネツガ                 デル。

自動詞文の主語と他動詞文の主語とがひとつになって他動詞文の直接補語に対立していることは、a、cタイプのがわになるようである。ただ、格のマークのつけかたが、いかにも律儀で日本語は主体－客体表現をこんなに大事にしていたのかとおどろかされる。鈴木泰「日本語」(『日本語文法辞典』未刊)ではこのことを「やや過剰なしるしづけ性」とよんでいる。

このようにみてくると、主体－客体表現をになう名詞項の格のかたちが、ハダカ形だとかマークされた対格形だとか、バラバラにとりあげるだけでは、主体・客体表現にひそむだいたいな情報をききのがしてしまうことがみてとれる。名詞項の格形式の対立をとりだして、体系化することによって、対格タイプ、主格タイプ、能格タイプなどのちがいがあきらかになってくる。

なお、名詞項がすべてハダカ形であらわれるつぎのパターンもかんがえておく必要がある。名詞がすべてマークなしで、動詞のほうに主体－客体表現にかかわるマークをつけるてつづきもありうるが、ここではふれない。

- f アグリ ネット ダス。  
      ネット デル。

一般的に、文法的なマークがないのに文法的な意味＝機能がよみとれるのは、名詞の語彙的な意味が、文法的な意味＝機能をあいずすることができるからである。個々の単語の語彙的な意味はたがいに対立しながらも、にたもの同士が統一して、あれこれの意味クラスをかたちづくる。

意味クラス(カテゴリーカルな意味)がちがうと、文法的なふるまいがちがってくることは知られている。奄美大島北部方言(の一部)で、アグリトゥ アスイビュン(アグリとあそぶ)といえば、トゥ格の名詞はなかまをさししめすが、ギッタトゥ アスイビュン(まりで あそぶ)ではトゥ格は道具をしめす。このちがいは、名詞の意味クラスがそれぞれヒト名詞かモノ名詞かによってわかれたものである。fでもヒト名詞アグリと現象名詞ネツの意味クラスのちがいに、言語によっては主体－客体関係のあらわしわけをになわせることがある。鈴木泰「日本語」に「対格形式が間投助辞のヲから生まれるまでは、主格と対格は区別されず、ともに名詞のはだかの形によって表されていた。」(『日本語文法辞典』)とあるのは、古代語にfのようなパターンをみているのだろう。

日本語で主体－客体表現の格表示が、すべてハダカ形の段階から、すべてマークされた段階へと変化しているのは、相当なへだたりといわなくてはならない。日本語の通時的な研究ではこの間の事情を正確にうめていく必要がある。

クリモフの内容類型学でとりだす活格タイプ **active type** の言語は、名詞に格形式がまだ発達していないといわれる。だとすれば、そこには名詞の意味クラスという本来は語彙的なものの、文法的な側面への積極的なかわりが想定されている。

3. 主体－客体表現と述語動詞) 主体－客体表現をになう名詞項をとりあげるにあたって、いままでみてきたように、名詞項のかかわる述語部分に関して、一定の情報が必要である。そのばあい、対立するタイプとしてとりだされる対格タイプと能格タイプとは、述語動詞に関しては、ともに自動詞・他動詞というわくぐみで説明される。これは便宜的なものではなく、能格タイプの言語にも、述語となる動詞については、自動詞－他動詞の対立が事実として存在するということのようなのである。

しかし、自動詞・他動詞のワクぐみをかりると、自動詞文の文法が能格タイプのような一本化したかたちであらわれず、自動詞文がふたつに分裂するパターンになるばあいがある。自動詞文が分裂するというのは能格タイプを基準にしてのはなしである。

f    アグリガ    ネット    ダス。    他動詞文  
      アグリガ         イク。    自動詞文  
                  ネット    デル。    〃

自動詞のなかでも、イク、モドル、アルク、ハシルのような移動や移動のしかたをあらわす動詞は、直接補語こそとらないものの、他動詞文と同様、マークされた主語をとる。その主語は動作のシテ（能動主体）をあらわしている。典型的な能格タイプの文が、述語動詞の意味クラスからも、主語の意味クラスからもはなれて、純粹化された文法形式の面で構文をくみたてるところは、典型的な対格タイプとかわらない。

それに対して、うえにしめしたパターンでは、動詞の自他との対応からいうと、自動詞文が二分されて、規則性、体系性がくずれているようにみえるが、他動詞グループと同一にふるまうイク、モドルなどの移動動詞は、能動主体の動作、典型的にはヒトの行為をしめす点で、典型的な他動詞とふるまいがおなじである。ここには自動詞－他動詞という区別が厳密に文法化するまえの、現実のデキゴトをコトガラとしてすなおにとらえた、ヨリ意味構造に即した内容的な区別がなりたっている。それを体系性のくずれとか欠落ということではできない。なお、能動主体の他動詞文という点からは、ネット    ダスよりサケ    ノムのような他動詞のほうがふさわしいことは、以下にしめす例にでている。

このfのようなパターンは、クリモフによって明確に能格タイプと区別してとりだされ、活格タイプとよばれることになった。現実の反映としての文の意味構造という内容面が、どれだけ文法化して表現面にあらわれるかをみれば、活格タイプにくらべて、対格タイプ

はもちろん、能格タイプであっても、意味構造から乖離した文法構造になっているように見える。それは言語が現実によってしばられることから解放されるみちすじかもしれない。しかし、そこには逆に、文法構造が意味構造をしばるという文法専制の傾向を指摘することもできる。文法専制のしくみによって、言語の現実反映能力がのびるとはかならずしもいえない。文の対象的な意味に関しては、対格タイプの文 「アメガ 外出ヲ サマタゲタ。」は、アメガが原因主語であることが確認されたうえで、現実のデキゴトに対応することになる。だとすれば、ここをすなおに表現する文法的なしくみをもつ言語タイプにくらべて、対格タイプが上等だということにはならない。クリモフは、活格→能格→対格タイプ、あるいは、活格→対格タイプのような一方向的な展開をみとめているが、それは各タイプのまさりおとりということにはむすびつけていない。

こうして、他動詞と移動動詞の類をひとくくりにする動詞分類だと、さきにふれたヒトの能動的なうごきをあらわすという点で、それを行為動詞、能動詞 **active verb** とすることになる。これに対立する自動詞グループは、他動詞－自動詞 **transitive-intransitive** の対立になぞらえれば、**inactive verb** 所動詞である。動詞の内容面をヨリ反映させるなづけなら、状態動詞、存現動詞のようなよびなもありうる。他動詞－自動詞の対立というワクぐみからはなれた能動詞－所動詞の対立は、活格タイプの動詞のものといえる。

4. 琉球方言にみられる活格性) 北琉球方言に属する奄美喜界島阿伝方言では、行為のシテをあらわすガ格（鼻濁音であらわれる）が、ハダカ形と対立して、つぎのような主体－客体表現のパターンをつくりだす。

トゥユガ	セー	ヌドゥイ.	トヨが	さけを	のんでいる。	(他動詞文)
トゥユガ		イチュイ.	トヨが	いく。		(移動自動詞文)
ティダ		アーユイ.	日	が	のぼる。	(自動詞文)
ナダ		ウティユイ.	なみだ	が	おちる。	(自動詞文)

他動詞文と移動自動詞文がまとまって、それに自然現象や人間現象、さらにコー ネーラン（かいがない）。アジ ネーラン ユミタ（あじの ない ことば）のような（非）存在をあらわす文をふくめたグループが対立する。このしくみはさきにみた活格タイプの名詞項と動詞との対立にかさなる。

このような活格性のとりだしは、クリモフを自己流にたどりよみした結果、松本 1982「琉球方言の主格表現の問題点－岩倉市郎『喜界島方言集』の価値」と題をつけて発表したのがはじめである。その後もほそぼそと研究をつづけ、松本 1990「〈能格〉現象と日本語」ほかのかきものができた。それらのおおよそは松本 2006『連語論と統語論』（至文堂）にまとめられている。これらの活格性の指摘に共感して奄美出身の田畑千秋 2009「奄美大島名瀬方言の主語と述語、そして補語」（類型学研究会発表、未公刊）ほかの論考が発表されたことにちからをえて、その後も田畑・松本両名で奄美諸方言の活格性に関して勉強中である。

表現面において活格性のしるしとなる、対格形とかさなる名詞のハダカ形の主格用法は、

奄美諸島から沖縄本島にかけての北琉球方言にみられる。ただし、その用法の範囲と、体系における安定度は一様ではない。沖縄本島北部方言に関して最近刊行された名護市役所編 2006『名護市史本編・10方言』には自然現象をあらわす文の主格的なハダカ形が指摘されているが、人間現象（生理、心理、社会現象）にかかわる文のハダカ形の主語のことにはふれていない。また、現地でこの種のハダカ形の存否を確認していると、シマ（集落）によって、マチガイではないが…などというコメントつきのあることがある。岩倉『喜界島方言集』の地点である阿伝でも、いまは岩倉の記述がすらすら承認されるわけではない。

喜界島大朝戸ユミタは、岩倉『方言集』とのつきあわせをしながらおそわっているときでも、主格的なハダカ形がみられなかった。そこでは主語はすべてガ格でいえるというしくみになっている結果、つぎのパターンにえがきだされる。

トゥユガ	セー	ヌドゥイ。
トゥユガ		イチュイ。
ティダガ		アーユイ。
ナダガ		ウティユイ。

これだと、活格や能格タイプでないが、まえにあげた **marked nominative** をもつ主格タイプということになる。してみると、主格タイプは、活格タイプ（格体系の成立している段階の）、能格タイプのマークされた主語が、その勢力をひろげていった結果、生じてくることがかんがえられる。

一方、大朝戸方言では、他動詞にふたつの系列がみとめられて、オトスにあたる動詞ならウトゥスイのほかに、自動詞ウティユイからつくられたウティラスイのようなかたちがある。前者が主体動作の面をとりあげるのに対して、後者は客体変化の面をあらわそうとする傾向がある。これは、主格タイプ言語へとさまがわりしてきた結果、能動詞－所動詞の対立が他動詞－自動詞対立へともうがえしたはずの動詞の領域に、ふたたび能動詞－所動詞の対立をもちこんだかのようなのである。一種の先祖がえりといっている（E. バンヴェニスト、山口巖参照）

おなじような現象とみられるものに、移動自動詞に代表されるグループの統語的他動詞化といえそうな変身がある。ドコドコヘイクは標準語にへ格が存在するのと同様、奄美大島名瀬方言では ナゼチ イキユン（名瀬にいく）のように、マークされたチ格形をとる。

しかし、このチ格形がふりおとされた ナゼ イキユンというハダカ形でもいえる。喜界島方言にもおなじ傾向がある。ここにみられるのは、移動自動詞も他動詞とおなじヒトの行為をあらわす能動詞であるという点にこだわりをみせて、その内容面での統一を、外形＝表現面までおよぼしたことになっている。

田畑 2009 によれば、名瀬方言には、動詞述語の直前にたつ名詞成分はハダカ形をとろう

とするという。非能動主体やさらにシテ＝能動主体さえも、この傾向にそってハダカ形であらわれることがありうるとしても、ここで直接補語に準じてもっともハダカ形でやすい名詞項としては、補語なかまの、間接補語をその代表としてとりだすことができる。つまり、移動自動詞だけでなく、能動的な自動詞一般にも、ハダカ形補語がみとめられることになる。これも、他動詞構造を借用して、以前の能動詞のグループの結束・統一をはかろうとする、一種の先祖がえりにあたるだろう。なお、ウズベク語のハダカ形がさまざまな間接補語の役わりほかを代行している例をあげながら、ポリヴァーノフ 2010『言語学・文学用語辞典』（ロシア語）では、ハダカ形の用法のひろがり屈折タイプより膠着タイプのほうに顕著だということが指摘されている。

活格タイプの文にあらわれるハダカ形の名詞の内容面にもふれておかなくてはならない。これについて、さきのパターン化で、述語動詞のちがいに応じてハダカ形のポジションを左右に移動させることをしなかった。うごかすおとつぎのような表示になるが、これはとるべきでない。

アグリガ ネット ダス。  
ネット デル。

たびたび紹介したことがあるが、琉球方言のはなしてのいいまちがいに、メヲ サメテ、ネツヲ デテというのがあるという（桑江良行 1954 改訂『沖縄語の研究』）。このまちがいがなりたつのは、うえのパターンでいえば、ハダカ形ネットがおなじひとつのものとして、はなしてにとらえられているからである。それをうえのようにきりはなすのは、対格タイプのがわからタイポロジカルな現象をみることになる。なお、桑江 1954 のほか、チェンバレン、『沖縄語辞典』にてらして、沖縄本島南部方言にはティダ アガトーン、（太陽があがっている）のような自然現象文のほかに、ミー サミュン（目がさめる）のような人間現象もハダカ形主語をとってあらわれるようである。

5. 奄美諸方言のヌ格主語）奄美大島方言では、現象・存在文にハダカ形の主語よりもノ格にあたるヌ格の主語があらわれるほうがふつうである。古代日本語にも、従属節の主語にガ格形、ノ格形があったことは知られているので、ふつうはつぎのように、Nガ、Nヌを主語のがわにおくだろう。

サブロガ ホン ユミュン。三郎が 本を よむ。  
サブロガ イキュン。三郎が いく。  
ネイツィヌ イジン。熱が での。

しかし、いままでみてきた活格制度をかながえにいれると、ヌ格主語には、ハダカ形主語をひきついでいるという面があるともかながえられる。その点を強調すれば、ヌ格主語がハダカ形主語とならぶことになる。そして、ハダカ形の内容面はもっぱら対格的なものへとうつたようにみえる。

サブログ ホン ユミュン.  
 サブログ イキュン.  
 ネイツィヌ イジン.

奄美大島方言は喜界島阿伝方言などほどはハダカ形主語がでなくなっていることはいえるが、その主語がまだ本来シテをあらわすガ格に統一されるまではっていない。そして、方言はなしことばとしての規範性という点で若干の抵抗感があるようだが、ハダカ形主語も、まったく排除されるわけではない。ヌ格主語は、ガ格と別のヌ格形をまもることによって、ガ格主語と一線にならぶあつかいを、なお拒否している。その拒否のみなもとは、以前のハダカ形の内容面の残像である。

6. 活格構文と意味的な特徴—存現文のばあい) 対格タイプのがわかからのとらえかたになるが、活格タイプの構文では「主語」がふたとおりのかたちであられる。このうち、しるしづけをうけないハダカ形、あるいはノ格の主語は、現象、存在をあらわす文の非能動的な主語をあらわしていた。ここでは、この種の主語をもつ文にみられる意味的な特徴のことにふれておく。

現象文にえがかれる現象は個別的である。個別的な現象をハナシテがアクチュアルにとらえたとき、現象文がなりたつ。過去のアクチュアルな現象もあるが、ここでいう現象文とは、ハナシテが ココで、イマとらえたという時間的、空間的な制約をともなつてあらわれる。

- ・ ハディ トウリティヤー. かぜが やんだね。(阿伝)
- ・ スー ミチュイ. しおが みちてくる。(阿伝)

現在の阿伝方言では ハディ トウリティとハディヌ トウリティとを区別することができるようで、そのばあい、ハダカ形主語のほうはデキゴトを全体として気づいてのべている。一方、ハディヌのほうは、台風のときなどのようにかぜのことが念頭にあってのべているという。

奄美大島北部方言では、ハダカ形の主語よりヌ格の主語は強調的というようなこたえができることがある。阿伝の対立とおなじ面があるのだろう。

- ・ アムィ フリュリヤー. あめが ふりよるねえ。(笠利町和野)
- ・ アムィヌ フリュリヤー. // ( // )

また、ハダカ形の主語のほうは、自分にいいきかせる、ひとりごとのときにかもとも説明をうける。ひとりごとのというのはあいてへの報告的でなく、単なる記述＝描写的ということである。

- ・ キュヤ ナンヌ タッチュリヤー. きょうは なみが たってるねえ。(ひとにいう) (和野)
- ・ ナン タッチュリヤー. なみが たってるねえ。(みずからに) (和野)

あいてにむけられる例もあるが、全体としてはすくないようである。

- ・ クワシ アッドー、ミシヨランナ. 菓子が あるよ、おたべよ。(大和村 戸円)



- ・ タバク アッドー. タバコ あるよ。 ( 〱 )

奄美大島北部方言ではヌ格主語とリ形述語とからなる文はうえにみてきたようなメノマエの実写をえがく形式として定着しているが、ハダカ形主語も禁じられてはいない。

- ・ ハナヌ サキュリ/サチュリ. (メノマエに) はなが さいている。(シマウタ歌詞)
- ・ ムィズィヌ イジトゥリ. みずが でている。(龍郷町番屋)
- ・ アムィヌ フリュリ/フトゥリ. あめが ふっている。(シマウタ)
- ・ アクェー、アムィ フリュリヤー. あれまあ、あめが ふっている。(和野、笠利町川上)
- ・ クーラ キキュリヤー. ヒグルサ ナティ. クーラー きいてるねえ。 さむく なった。

シヲリ、シテヲリ形由来のリ形のほかシタリ形もメノマエ性をあらわす。

- ・ ユー ワシャリヤー. (みていて) 湯が わいている (わいて ある、わいた) ね。(和野)

他動詞文でも現象をあらわすときはリ形述語と呼応してメノマエ性をもつ。さらにヒト主語でもハダカ形とリ形との相関にささえられて、ヒトの行為としてでなく、ヒトにかかわる現象をあらわすことができる。

- ・ ウシヌ ムィズィ ヌミュリ. うしが みずを のみよる。(龍郷町瀬留)
- ・ アーブチ、アンマ タタトゥリ. あれまあ おっかあが おこってる。(戸円)
- ・ タロー ナチュリ. 太郎が ないてる。(戸円)

うえの例どもから感じられるように、メノマエの実景を独言的にのべたてるときは、感情調としての詠嘆性があらわれるようである。感動詞の共起がみられるのもそのせいだろう。

ハナシテ自身の現象をのべるときは述語はリ形にならない。主語がハダカ形だと、ひとりごとの面がつよいようである。

- ・ アグェ、ムィ サメエティ. あれ、めが さめた。(戸円)
- ・ シクダイ オワタ. 宿題が おわった。(戸円)

これらの例にあらわれる特徴は、構文の発展という点からいうと、二語文とはいえ、言語外の多様な現実を表現するてまえの、まだ出発点的な段階、ハナシテ=イマ=ココということにしばられてあらわれるせまい領域にかぎられているようにみえる。うえに指摘した感動的なふくみの面なども、そのことと無関係ではないだろう。

7. 言語タイプの中心と周辺) 孤立、膠着、屈折のような言語の形態論的なタイプの変化が循環的であるのに対して、活格、能格、対格という内容類型学的なタイプはあともどろしない一方的な変化をしめすとクリモフはのべる。変化は当然歴史的だから、かりに典型的な〇〇タイプが実現することがあるとしても、その前後は歴史をひきずって、前段階のなごり、将来のタイプの予兆のようなものはらみつつ、歴史的なものとして存在してい

る。こうして、ある言語の現在のタイプにはそのタイプを特徴づける、クリモフのいう包含事象とともに、そのタイプのものとはいえない随伴事象をもみいだすことができる。随伴事象はさらに、その言語の過去のタイプ制度をひきずる特徴と、将来のタイプへとつながる特徴とにわかれる。

現代日本語の文法的、語彙的な特徴のなかで、存在を意味する動詞がイキモノの存在（イル）とモノの存在（アル）とにわかれるのは活格構造に直結する。この対立がほかにもナクナール以下イモヅル式にそろえば活格タイプそのものだろう。存在動詞で所有をあらわすことも、活格タイプ性につながるものとされる。また、うけみ文が全面発達しているとはいえないことも、うけみをかかえこむボイスのカテゴリーの成立していない活格タイプ性と無関係ではなさそうだ。主語にマークがつくのもなんとなくあやしい感じがする。

日本語文法のなかで争点とされる項目にも、活格タイプ性とかかわってきそうなものがある。動詞の自他の区別をみとめないたちは、活格制度につながる。また動詞の時間表現をめぐって、現代語でもタ形にテンス性よりアスペクト性をみることも、アスペクト＞テンスといわれる活格タイプにあしばをおくことになる。

これらのことから、現代日本語のタイプの中心をみあやまる必要はないとしても、かつての日本語の中心が、現代とはちがっていたこと、現代日本語にもその痕跡があれこれみられることは指摘していいだろう。これらの事実を強調するための方便として、日本語の複焦点性、あるいは楕円構造をえがくことは、他の言語とのタイポロジカルなちがいを理解しやすくする面があるかもしれない。

8. 琉球方言と中国語－内容類型学からみて－) 日本語と中国語では、形態論的なタイプが別だし、語順の点でも、OVタイプの日本語に対して、中国語がVOタイプである、などからみて、タイポロジカルな共通性がいわれることはすくない。しかし、形態論は別として、シンタクチカルな側面のディテールからは、二重主格的な現象や空間的な補語（賓語）の存在など、語順という外形＝表現面にかくれた、内容面での共通性がうきでてくるようにおもわれる。

うえに紹介した喜界島阿伝方言ほかにみられる、現象、存在をあらわす文の主語がシテ主語とちがってハダカ形であられる、そしてハダカ形はこの方言の（さらに北琉球方言一般の）直接補語をになうかたちであることも、中国語と日本語とが語順のちがいをこえてかよいあう内容面での共通性へとつながるとみたい。中国語のこの構文は存現文、あるいは「起る構造」としてしられている。

いままでみてきた阿伝方言の構文現象に活格タイプ性へとつながる点がみとめられるとすれば、それに対応する中国語の存現構造も、活格タイプのしくみと無関係ではないはずである。

形態論的なタイプと内容類型学からのタイプとのあいだに、緊密な相関関係があるなどとかんがえることはできない。もし、1：1対応が両者のあいだになりたつとすれば、形

態論的なタイプ即内容類型学的なタイプということになってしまうから、内容類型学をい  
いだす必要がなくなってしまう。言語の内容面での活格タイプの表現面は、膠着的であっ  
ても屈折的であっても、孤立的であってもかまわないのではないか。だとすれば、阿伝方  
言は膠着的なてつづきに活格タイプ性をもりこんでいるし、中国語は孤立タイプである結  
果、語順にたよって活格タイプ性を実現していることになる。

9. 結果表現をめぐって)「ドアを あけたが あかなかった。」のような文がなりたつか  
どうかに関しては、動詞によってちがいがあ。ドアヲ アケル、電話ヲ カケルなど  
はいえるが、クロスのような動詞についてはなりたたない。さきの喜界島大朝戸方言の主  
体動作他動詞と客体変化他動詞のあいだにも、後者は客体のさまがわりの側面まであらわ  
すというちがいがみられる。そこでは「ドアを あけたが あかなかった。」は客体変化他  
動詞のほうではなりたたないのが原則である。

一方、言語によっても、このような文をどの程度ゆるすかにちがいがあることが指摘さ  
れている。英語の他動詞が日本語にくらべてさまがわり(結果)までふくみやすい、日本  
語他動詞は中国語にくらべてさまがわりまでふくみやすいなど(宮島達夫『語彙論研究』  
参照)。

クダク、ワル、ヤブルのような動詞が対象にはたらきかけてさまがわりさせるまでをあら  
わすことができるのに対して、ナデル、サスル、モムなどの動詞は、対象にはたらきか  
けて「接触」をおこす段階までしかあらわさず、そのさきのさまがわりには無関心である。  
もの自体のさまがわり(もようがえ)や各種の位置変化(とりつけ、とりはずし、うつし  
かえ)をあらわすことが、典型的、中心的な他動詞性のあらわれだとすれば、接触(ふれ  
あい)の段階にとどまる他動詞はその他動詞性において周辺的である。奥田靖雄1967  
~71「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(『日本語文法・連語論(資料編)』所収)には  
この点に関してカッコ内のようななづけた他動詞のカテゴリーがとりだされている。

ふれあい動詞が、他動詞グループでなく自動詞グループになる言語が存在するのも、ふ  
れあい動詞が他動詞といっても周辺的なことのあらわれであろう。日本語でもサワルには  
~ヲ サワルもあれば自動詞的な~ニ サワルもみられる。

奥田「を格の…」をよりどころにして、うえに紹介した他動詞述語にあたる中国語表現  
をつきあわせた方美麗『物に対する働きかけを表す述語—日中対照研究—』でははたらき  
かけを動作、さまがわりを変化とよびわけて、日本語のそれぞれの連語にあたる部分に、  
もようがえ動作動詞—もようがえ変化動詞、とりつけ動作動詞—とりつけ変化動詞のよう  
な区分があらわれる。メシヲタク、イエヲタテルなど生産物をあらわすつくりだしのむす  
びつきにおいてさえ、この二種がとりだされるが、ふれあい動詞のところだけ、この二種  
の区別がない。これは、うえにみたように、ふれあい動詞がはたらきかけ=動作の段階ま  
でしかしめしていなくて、さまがわり=変化の段階が存在しないためである。

方『物に対する…』のいう○○動作動詞は、こうみてくると、日本語のふれあい動詞に

あたる性質をもつといえる。ふれあい動詞は、他動詞のなかでも周縁的であることもさき  
にのべた。だとすれば、中国語の他動詞において、○○動作動詞も、他動詞として周縁的  
な特徴しかもたないということになる。さまがわりまでふくむ○○変化動詞は、結果補語  
がついた他動詞、あるいはヤホントフ流にいえば複合他動詞だから、他動詞として二次的  
である。つまり、一次的な他動詞はなお、他動詞の中心には位置づけることができない。  
行為動詞のような用語があらわれるゆえんである。さきの喜界島方言の主体動作動詞の系  
列にも、中国語と同様の傾向がみられそうである。この種のかよいも内容類型学の観点  
からはちいさくない意味をもつとかがえられる。

10. おわりに（先駆者たち）クリモフによる活格構造とりだしのはるか以前から、し  
かも日本の研究のながれのなかで、結果としてクリモフの所論へとあゆむことになった学  
者がいた。日本語にそのようにとらえたい側面が客観的にそなわっていたから、この  
ようなことになるのだとすれば、このあたりの事情も無視できない。

権田直助 三上章も引用している動詞分類がしられている。

- 1 おのづから 然る
- 2 みづから 然する
- 3 ものを 然する

この三分法で、2, 3が「然する」とおなじかたちであらわされていることに注意した  
い。また、「おのづから」に対して「みづから」はシテの積極的な行為をほのめかす。「お  
のづから」は自然ニ ナリユキデということだから、「然る」は非行為的な現象をあらわす。  
そうすると、2, 3の「然する」は行為をあらわしている。このパターンはさきにしめし  
た活格制度の三分にそのまま照応する。

佐久間 鼎 1941『日本語の特質』にヨーロッパ風の表現の「人間本位的」に対して、  
日本語の「自然本位的あるいは非人間的」な傾向をいう。また、「日本語ではとかく物事が  
『おのづから然る』やうに表現しようとする傾を示す…」という指摘もみえる。

三尾 砂 1948『国語法文章論』で、判断文に対して現象文を区別し、アメガ フッテ  
ル. 本ガ アル. などの例文をあげる。また、現象文であらわされるデキゴトのアクチュ  
アル性を「時所的制約」という用語で指摘し、「やあ、およめさんが行く。」のような現象  
文に関して、「眼前に進行することを動的に表現する場合」をとりあげる。

三上 章 活格制度に関してはその能動詞・所動詞の区別が直結するが、全体として三  
上は日本語を活格タイプ性に中心をおいて説明しようとしていたようにさえみえる。三上  
が日本語にみいだしていったものが、琉球方言にはより明確なすがたでみとめられるので

はないか。

藤堂 明保 中国語学者として、中国語の「向う構造」と「起る構造」を区別した（中国での研究で存現構造がとりだされたこととの関連をしりたい）。そのさい、日本における漢文訓読のなかで、両構造が以前は区別されていて、「起る構造」のなかでいまヲをおくってよんでいるものにも、ハダカ形でのよみこのよみかたがきえたことには、ハダカ形の用法が限定され、格のマークが定着していくという、日本語のがわの事情もかかわっているかもしれないがあったことをしめた。また、「行為動詞」の用語も1979『中国語概論』にみえる。このよみかたがきえたことには、ハダカ形の用法が限定され、格のマークが定着していくという、日本語のがわの事情もかかわっているかもしれない。

池上 嘉彦 1981『「する」と「なる」の言語学』ほかも、うえからのながれのなかにおくと、その主張の活格タイプ性への方向性がみえてくる。

× × ×

クリモフの内容類型学では、文法研究においても語彙的なものを無視してはならないことがとかれる。こうして、活格タイプ言語が、文法のしくみにおいて語彙的なものを圧殺せず、「主語専制」（三上章）のようなかたちであられる文法の独走、暴走あるいは特殊化におちいついていないことがそれとしてとりだされることになる。

一般に、内容と形式の対立・統一において、内容を優位とするのは原則である。言語における語彙的なものと文法的なものとの対立をみても、語彙的なものが内容として優位をしめるのは当然であろう。クリモフが、ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフから「文法には前もって語彙及び意味に存在しなかったものは何もない…」(クリモフ1977『新しい言語類型学・活格構造言語とは何か』三省堂)を共感をもって引用するのもまた当然といえる。

クリモフにであうまえに松本は、所属していた言語学研究会の勉強で、会のリーダーの故奥田靖雄から、直接ヴィノグラードフのてほどきをうけた。そのとき、ヴィノグラードフの「実証」とともに内容と形式の弁証法をまなぶべきことを指導されたようにおもう。

中国語は日本語以上に、その文法構造に語彙的なものの優位がうきでくる言語のようである。語彙的なものを不当にきりすてない文法が、ここでももとめられているとかがえられる。

関連文献から

奥田靖雄 1984『ことばの研究・序説』むぎ書房

クリモフ、ゲ・ア 1977 石田修一訳 1999『新しい言語類型学—活格構造言語とは何か』三省堂

言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

サビア、E.1921 安藤貞雄訳 1998『言語—ことばの研究・序説—』岩波文庫

- 藤堂明保 1956 『中国文法の研究』 江南書院
- 1979 『中国語概論』 大修館
- 藤堂明保・近藤光男 1957 『中国古典の読みかた—漢文の文法—』 江南書院
- 松本泰丈 1993 「名詞の主体＝客体格の用法と問題点—奄美大島北部方言（龍郷町瀬留）」  
 （仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版）
- 2005 「マークされない名詞のかたちをめぐって」（『国語と国文学』1月号 至文堂）
- 2006 「はらきかけともようがえ」（言語学研究会『ことばの科学』11 むぎ書房）
- 2006 『連語論と統語論』 至文堂
- 2010 「主体—客体表現と形態論的なしるしづけ—類型学からみた日本語」（須田淳一・新居田純野  
 編『日本語形態の諸問題』ひつじ書房）
- 2011 「さまざまな〈膠着〉—〈膠着〉再説—」（『類型学研究』3）
- 三上章 1953 『現代語法序説—シンタクスの試み—』 刀江書院 のちくろしお出版
- 1955 『現代語法新説』 ”
- 宮島達夫 1994 『語彙論研究』 むぎ書房
- ヤーホントフ、エス． イェ． 1957 橋本萬太郎訳 1987 『中国語動詞の研究』 白帝社
- 山口巖 1995 『類型学序説—ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』 京都大学出版会
- 2005 『ロシア文法の周辺—一般言語学への招待』 日本古代ロシア研究会
- Поливанов, Е. Д. 2010 Словарь лингвистических и литературно-  
 роведческих терминов (言語学・文学用語辞典), 《ЛИБРОКОМ》

(2011. 6. 22てなoshi)